経営の散歩道

三内丸山の縄文遺跡を訪ねて

その2

富山短期大学名誉教授
川中清司

三時代をタイムスリップする複合遺跡

三内丸山は次のような三時代の複合遺跡である。

(1)縄文時代前期から中期（約五五〇〇年前～四〇〇〇年前）の大集落跡

(2)平安時代（約一〇〇〇年前）の集落跡

(3)中世末（約四〇〇年前）の城館跡

この中でもっとも興味深いのは縄文時代で、その大集落跡から発掘された掘建柱建物跡、住居跡だけでなく、大量の遺物が捨てられた谷（泥炭層）や、大規模な盛土のなかから、当時の生活様式や自然環境を知るうえで重要な遺物が見つかった。

縄文人はクリを栽培し常食していた。

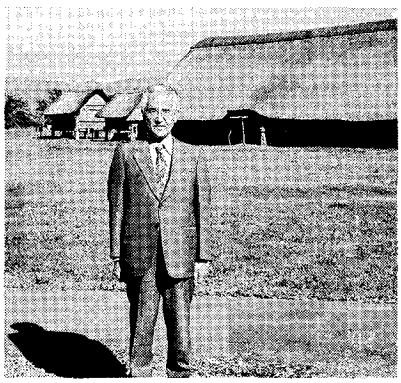
DNA分析から、渡来した種類ではなく、土地のものを栽培したものであることが分かった。

また、ヒョウタン、ゴマ、マメなどの南方系植物や、ゴボウ、ソバなどの北方系植物も出土しており、これらの遺物から、両方の民族が入り混じっていたと考えられている。

狩猟の移動生活から定住生活へ

縄文以前の生活は狩猟が中心であった。一定のところに定住せず絶えず移動した。洞窟や岩陰に潜んで風雨や寒気、野獣から身を守った。しかし、年老いた人は移動に加わることができずに果てなければならなかった。

縄文時代に入ると竪穴居住が始まる。直径五㍍ほどの丸型で、深さ数十㌢ぐらいの穴を掘り、真ん中に、クリやヒノキなどの柱を建て、カヤ、ササなどで屋根を葺く。支柱や梁に使う木材や結びつけるツル草を調達する。こうした仕事は何人かの協同作業が必要であり、すでに、協同社会と協業が成り立っていたわけだ。



復元された竪穴住居の前に立つ筆者

土器の利用からキッチンへ

土器は粘土をこねて形をつくり、乾燥させてから火で焼くことでき上がる。土器ができたことで、食べ物を煮て食べることができるようになった。石器時代でも石の器物の中に水を入れ、その中に焼き石を入れて煮ることは可能だったろう。しかし、土器はさまざまな食物の加工を可能にしていった。

おおまかに言えば、厚手式は中期で、薄手式は後期で、古い土器ほど下層から出土する。創始期は、丸底で置くのには不安定だが、煮炊きには便利だった。素焼きなので水がしみでて沸騰できないが、動物の脂などで隙間がふさがってきて、沸かせるようになったのだろう。

前期に入ると平底になり、竪穴住居の真ん中を掘って炉を設け、そこで使うようになり、炉の回りに石で囲んでカメを埋め、しだいに、キッチンの形に進んでいく。時代が下がるにしたがって、炉の灰を木の実のアクヌキに利用するようになる。後期になると、煮炊き用の深鉢土器が作られ、文様で飾らなくなり、しだいに、浅鉢や注口土器も出てくる。

定住生活から長老崇拝と祭祀へ

竪穴住居で、年寄りも一緒に住める。地理、季節の知識や、食物の作り方を教わる。住居の中には炉を作り煮炊きをし、家族生活をはぐくむ。出産と死の神秘さ、家族の愛ときずな、その中から、しだいに信仰が芽生える。石の棒を立て、祭壇を祭る方向へ進む。死者を葬るにも一つの方式を生み出す。たとえば、日の出と日没の方向にあわせて死体を寝かせるなどの形が見られ、霊に対する意識の存在を推測させるのである。